



## 職業選択と学歴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00003920">https://doi.org/10.24729/00003920</a>

# 職業選択と学歴

野村 哲也

## 一 職業選択問題の関連枠

職業選択の問題を考察するには幾つかの関連枠が考えられるが、それ等を集約すれば、ほぼ次の三つの領域に分けられよう。

- (1) 職業ないしは職業階層そのものについての社会構造論的考察
- (2) 職業選択の持つ社会関係の意味、特に階層移動の問題についての考察
- (3) 選択というプロセス自体についての関連枠、即ち選択者の個人的条件と、選択の範囲や可能性に関する社会的条件についての考察

1、第一の問題の職業階層は、パーソンズの表現をかりれば、社会体系における役割と報酬の配分にかかわるものであって、社会構造を根底において規定するものと言える。<sup>(1)</sup>

即ち役割の配分とは、社会的分業の組織へ個人を組み入れることであり、言葉をかえれば、社会の諸部門への人員の配置 (manpower allocation) であって、個人はそれぞれの役割 (職業) に就く事によって、社会的分業の一端を担い社会への参加と社会的連帯を保持する。

一方、報酬の配分は、社会におけるそれぞれの役割（職業）に要求される能力や労力に応じ、又その機能的重要性に応じて行なわれるものであり、K・デイヴィスらの言うように、その配分は一次的には需要―供給論の原則に基づくと考えていいだろう。<sup>(2)</sup>（当然の事ながら、ここで言う報酬とは収入のみでなく、威信、名誉等をも含んだものである。）いわゆる職業階層は、報酬配分が、定型化され広く承認される事によって成立つものであり、大抵の社会で、職業階層がほぼ明確になっていているということは、報酬配分に当たっての評価の基準が、ほぼ一致し定着しており、職業がその社会における役割と報酬の複合体として存在することを示すものであろう。

しかしながらこの役割配分と報酬配分との間には、しばしばギャップがある。というより本質的に報酬の配分は、役割の配分よりも遅滞する傾向にあるようである。先駆者的仕事に対する社会の評価（報酬）はしばしば非常に低く、時には死後何年かを経てその偉大さや重要さに気付くという事すらある。逆に又、ある時期において高い報酬を与えられていた職業や地位は、その機能的重要性を失った後も、惰性的に依然として前と同じ報酬が与えられる傾向を持つ。特に社会的威信や名誉のような精神的報酬については、一層その傾向が強いように思われる。

ところで、現代のように職業構造の変動の激しい所では、この役割と報酬のバランスは非常に崩れやすい。即ち、著しい科学技術の進歩に伴い、一方では特殊な分野における高度な専門化が進むと共に、他方、労働過程の機械化、合理化に伴う作業の単純化が進み、種々の職業の機能的重要性は大きく変化して来た。そしてこの現象は、職業に就こうとする人々を、高度の知識や能力を要求されるエリートと、殆んど何らの特殊能力を必要とされない大衆とに分ける傾向を生みつつあるが、この事が後に述べるように、大衆の側に、本来的な職業選択の基準とは別な基準を生み出す原因となり、それが報酬配分の基準（従って又職業階層）にも、又選択のプロセスそのものにも混乱を起こさせつつあるように思われる。

2、ところで職業選択が、現実の問題として生起するには、分業化され専門化され、しかも階層化された職業の存在と

共に、社会移動が自由であって、職業選択の機会が広く開放されていることが前提とされる。いわゆる近代化された諸国では、この二つの要件はほぼ満たされているが、個々の職業評価の基準や、階層移動の型、並びに機会と選択の自由度、及び階層移動の欲求の強さ、ないしは階層移動そのものについての価値意識等には、やはり各々の国の歴史的文化的背景によって相違がある。

日本の場合、明治維新以後、それまでの身分階層的秩序から解放されると、あたかもその反動でもあるかのごとく、「立身出世」が人々にとって大きな関心事の一つとなった。明治、大正期の志を抱く青年にとって、バイブル的存在であった「西国立志篇」に象徴されるごとく、貧より身を起し、宮々辛苦して学を修め、あるいは仕事に精を出して出世すること、即ち「立志伝中の人」となることは一つの美德ですらあった。

ところで幕末のエリートが多くが、蘭学を修め、あるいは禁を犯して外国に学ぼうとしたごとく、又明治初期の文明開化という言葉に象徴されるごとく、後進国の常として外から学ぶことが多かった為、西洋の新しい学問を身につけることが出世の登龍門であった。しかも就学の機会は一応すべての階層に解放されていたから、才能ある者にとって高い教育を受けることは、一番確実な階層移動への道であり、教育に対する意欲ないしは期待は非常に大きかった。

しかし、そうした状態も永く続くことによって当然惰性化し形骸化して来る。『教育を受ける』という事も、実質としての学力よりは、レッテルとしての学歴を求める心が強くなり、いわゆる学歴主義を生み出した事はよく知られたことである。しかもこの「学歴」すら高等教育の大衆化と共に次第に相対的価値を減じ、もはや専門的エリートへの道でなく、単にある種の職業へ就く為の必要条件となつて来たのである。即ち現在では、教育は平均的大衆にとって上昇移動への道としてではなく、人並みの生活をする為に、あるいは下降移動を起こさない為にやむを得ず受けねばならない苦役化しているといつてもいいだろう。特に日本では、終身雇用、年功序列的色彩を強く持つ為、学卒時の職業（進路）選択は、そ

の後の職業生活を規定し、社会移動の可能性をすら左右する傾向が強い。

しかしその重要性とは逆に、最近における実際の選択状況を見ると、一方においては興味や能力や職業観に基づいた本来的な意味での職業選択が困難になり、又個人の努力にもかかわらず社会移動を果し得る機会が少なくなつて、真剣に職業の問題を考えようとする者を困惑、失望させると共に、他方職業の社会的意味を問うこともなくマイホーム主義的な人生観を持つ者や、職業を通しての社会移動よりは余暇に——ミルズによればそれによって一時的な上層階級と身分的同一視を求めるのであるが<sup>13)</sup>——焦点を置く者にとっては、学歴主義的な一定のルールを踏んで行けば或程度の生活が約束される為、安易且つ非主体的な選択が行なわれるようになり、両者何れの面からも、本来の意味での職業選択が次第に多くの人々にとって関心の焦点から外れつつあるように思われる。前者については後に述べるとして、後者についての最大の原因は、C・Wミルズが「生産の偶像から余暇の偶像へ」と指摘したごとく、労働価値観から余暇、消費の価値観への変化にある。一寸の余暇をも惜しんで勤儉力行することはもはや美德でも価値ある行為でもなくなつた。むしろ最近では、いわゆる真面目人間は一種のカリカチュアとして嘲笑的に描かれる事が多いといつていいだろう。特に若い世代においては、労働の世界における無努力崇拜と、余暇の世界における力とエネルギーの讚美が一般的な風潮となつていようである。

### 3 職業選択における思考の枠組と、その発達心理的变化

本来、職業選択問題において考えられる階層移動への欲求とは、個人がある職業に従事することによって得られる報酬のより多きを求める欲求である。しかし人は報酬のみを考えて職業を選ぶものではない。従事する職業への興味、職業観、人生観等の価値意識も大きな意味を持つだろうし、それ等すべての要因は常に能力と関連させて考えられるだろう。即ち職業選択においては何らかの意味で、興味、価値、能力、報酬の四つの要因が考慮されるのである。しかしこれ等の要因

は常に同じウェイトで考えられるものではない。人によってウェイトの置かれ方には非常な巾があるであろうし、同一の人間でもその発達段階によって異なるであろう。更に又これ等の要因の何れかないしは全部を無視せざるを得ないような外的条件もあるだろう。子が自分の目差す職業に就く為の能力を養う為に上級学校に進みたいと思っても、家庭の経済的事情の為に進学出来なかつたり、家制度的な因習の故に家業を継がねばならなかつたりする事はよく見聞する所である。

こうした中で本稿において重要な問題は、前述の四つの要素のウェイトの置かれ方の発達段階的相違である。Eli Ginsbergによれば、その段階とは、幼少年期の偉人崇拜的、スター讚美的な夢想的、選択から、中学期の興味、中心的選択、更に高校期になると、職業の社会的意義についての理想主義的な価値意識が生まれ、更に高校卒業期から大学期にかけて現実的な条件としての自己の能力を考えるようになるだろうし、更により現実の問題として報酬を考えるようになるだろう。もちろんこれ等は相対的なドミナンスを言っただけで、中学卒の段階でも現実的な報酬を当然考えるであろうし、大学卒業期になつても将来への見通しや配慮よりは、現在の興味を重点に選択を行うものもあろう。

なお職業選択と切り離すことの出来ないものに学校選択がある。これは単に専門的能力ないしは高度の知性の習得というだけでなく、学校格差の問題とからみ合つて階層移動とも強いつながりをもつ。従つてここでは、職業選択に進学の問題を含めて——即ち進路選択の問題として——広い意味で考えることとする。

## 二 調査の概要と作業仮説

広義の職業選択の問題に関与する変数としては、前述のように、当の選択者の興味、能力、職業に対する評価、職業と関連づけられた学歴観、社会移動の欲求、人生観、労働—余暇観、及び家族背景因としての家庭の経済的要因、親の学歴観、職業観並びにそれを支える親自身の学歴、職業が考えられよう。

以下、その主要な変数について都市青少年の職業選択のメカニズム及び問題点を考えて行くことにする。なお日本の場合、特に学卒時に職業選択の問題が集約的にあらわれる。しかも、中学、高校、大学の各段階によって問題点は異なると思われるので、三つの時期に分けて考えたい。

この問題に関連した調査は前後三回行なった。第一は昭和41年3月に大阪府下の高校七校の二年生を対象に行なったもの（以下調査Ⅰという）で、学校差に基づいた高校のランクを主要変数にとり、高校生の種々の生活局面について、いわゆる一流高校から最下位クラスの高校に至るまでの志向の違いを見たものである。既にその一部は別の所に発表しているので詳しい調査の枠組については、それを参照していただきたい。<sup>(6)</sup>今回はその中で進路選択に関連したものを取り上げた。

第二は昭和43年12月に府下中学二校の二年生を対象としたもので、これも青年文化に関係したものであるが、その一部を今回とり上げた。（調査Ⅱ）

第三は、調査Ⅱの中の一校の昭和42年春の実際の進路状況を、父兄の職業及び子の学力と関連させて見たものである。

### （調査Ⅲ）

各調査共、ここでは男子のみの結果を取り上げてある。女子の場合は、生業的、ないしは、社会分業的な意味で職業が選択されることは少ないと考えたからである。従って厳密には男子の職業選択についての考察ということになる。

## 三 調査結果の分析

### 1 中学卒業期

中学卒業期に於ける職業選択を厳密な意味での職種選択と考えた場合、まずあげられるのは、その選択範囲の狭さであ

ろう。即ち、専門的職業に就ける程の知識や能力が中学卒で得られないことは言うまでもないが、下層ホワイトカラー的な単純事務的職業にすらくことは難かしく、大部分は、工員、職人、中小商店の店員、娯楽産業等の単純労働的仕事にしか就き得ない。たとえば、同じ売子でも大企業である百貨店の店員等は高校卒を資格としている所が多いのである。

更に又、職業を通しての社会移動という面から考えてみても、大企業の地位階梯のレールの上に乗ることは不可能に近いし、昔のように「裸一貫から」とか「職工からたたき上げて」といったような、ミルズの言う企業家型の成功が殆んど望み得なくなった現代社会では、中学卒で就き得る職業では、下層階級から浮び上ることは出来ないと言っている。う。

こうした事情は、ほぼすべての親達にとって、よく知られていることであるだけに、出来れば高校へ進学させてやりたという気持は非常に強いと見ていいだろう。昭和33年、中学生の親を対象に行われた森口氏等の調査<sup>8)</sup>でも、一応社会的に認められる地位につく為には、大学出の学歴が必要と考える者が47%で、それを含めて少なくとも高校以上の学校を卒業しなければならぬと考えている者は78%に上る。最近では更にこの傾向は高まっているだろう。従って今日では、経済的、あるいは能力的に特別な支障のない限り、高校へ進学するのが当り前となっており、(全国平均で約70%、大都市では80%が高校に進学する。)中学卒で就職するという事は何らかの意味で問題を含んでいると見なければならぬだろう。たとえば生計維持の為に、今すぐにも子の就労を必要とするという急迫した状況においては、将来性や適性を秤量する余裕などなく、さし当っての収入が重要なファクターになるであろうし、能力の面についても、職業適性という観点から考えられるよりは、高校教育に堪えられない為就職させるというケースが多いようである。更に又進学か就職かの決定には、親の職業観、学歴観も大きく作用する。たとえば、商売人には学歴はいらぬとか、職工の子は職工だ、といった考えから無理してまで高校へやる必要はないという形で、就職に向かわせる場合も考えられよう。先の森口氏等の調査で



表 1

父の職業と進路（調査Ⅲ）

職業	進路	進学		就職	N
		普通高校	実業高校		
ホワイト・カラー		(%) 53.5	40.7	5.8	86
自営商工業主		37.1	36.2	26.7	135
ブルー・カラー		12.3	28.2	60.5	188
その他		0.9	27.3	63.8	22

職業選択と学歴（野村）

表 2

学業成績と進路（調査Ⅲ）

		普通高校			工業高校		商業高校	就職	計
		A	B	C	A	B			
学 業 成 績	5	人 24	人 6	人 0	人 2	人 0	人 0	人 0	32
	4	10	28	1	36	8	9	1	93
	3	0	11	21	9	34	42	62	179
	2	0	0	13	0	1	6	64	84
	1	0	0	1	0	0	0	41	43
平均		4.8	3.75	2.6	3.85	3.16	3.05	2.1	431

(注) 学業成績は5段階法による。

平均はそれぞれの進路に進んだものの学業成績の平均、各進路間の平均値には有意な差がある。

A. B. Cはその順に各高校のランクを示す。

は、専門的職業およびホワイトカラーでは、学歴を重視せぬ者が8%であるのに対し、ブルーカラー及び農民層では16%が学歴不要と考えている。<sup>(9)</sup>我々の調査Ⅲでも中学卒で就職したものは、圧倒的にブルーカラー層の子弟が多く、又学業成績1のものは、ただ一人の例外を除いてすべて中学卒で就職している。(表1、2) もちろんこの成績とはあくまで中学校の学科についてであって、職業適性とは別のものである。

従って、就職者についての適性の発見や、選択の助言という面での教師の役割は、重要なものとなるのであるが、就職者の就職動機が家庭の事情による事が多いため、生徒の適性や、職業の将来性等、本来的な選択基準が通用しないことが多い。又生徒自身も空想的選択 (Phantastic choice) の段階を抜け切っていないことが多い為、将来を考えるよりは、現在の感覚的興味や、職業の外見的華やかさにひかれることが多く、せっかく適当な職業を捜しても、すぐ離職して華やかな娯楽的サービス業に就くなど、<sup>(10)</sup>指導に限界があり、お手あげに近いというのが実情であろう。もちろん中学卒業の段階でも、興味や価値にもとづいた主体的選択を行うものもある。直接就職するのではないが、商船高校や、水産、看護等の課程は卒業してからの職種がほぼ決まっているだけに、そこへの入学を希望する者にとつての選択は、事実上職業選択であるから、非常な決心を要する事であろう。ただ中学卒業段階では、まだ現実的選択 (Realistic choice) の時期にはいたらないし、職業についての知識や、階層的な将来性についての認識も十分でない。又青年期には理想主義的傾向が強く、職業選択を真剣に考える者程、職業の社会的緊要度や機能的重要性に重点が置かれやすく、種々の現実的な条件は軽視される。その結果、たとえば、ヒューマニスティックな気持から看護婦を志したが、現実の勤務条件や、給与の悪さ、看護婦という特殊な集団における人間関係のむつかしさ等に失望するといったケースも多い。

こうしたことを考える時、中学卒の段階では職業の主体的選択を行うに必要な条件は整っていないと言った方がよく、多少とも主体的な選択が可能になるのは高校卒業期という事になるが、その意味からも中学卒業者の高校選択は重要であ

る。

特に職業階層に、學歷主義、終身雇用、年功序列といった色彩が強い我が国においては、この学校選択とは、単に種々の課程の選択というだけでなく、学校差をも含んだものであり、どの高校に進学するかは、職業選択のみならず、階層移動にも大きな関連を持ち、極端に言えば、生涯の社会生活の大枠を決定するとさえ言えるのである。こうした観点から先の表2を見ると一層その状況がはっきりする。即ち商業高校と工業高校への進学者の成績を比較すれば、前者の平均が3・5、後者が3・1とかなりの開きがある。特に伝統ある公立工業学校（Aクラスと表示）への進学者は3・9と更に高く、普通課程のBクラスの高校入学者よりも高い。普通課程のAクラス高校を一応類型的に有名大学へ入学出来るものとし、普通課程のBを二流以下の大学へ入学するものとすれば、Aクラスの工業高校への進学者は、少なくとも中学卒業時の学力において二流以下の大学入学者より上位であると言える。更にCクラスの普通課程高校への進学者は、工業、商業等大体高校卒で就職すると見られるものよりも学力において低い。このCクラスの普通高校卒業者は、結局大部分大学へ進学出来ず、途中で方針を変えて就職する事になるが、学力が低い上に、特別な職業教育を受けていない為、中小企業や現業関係のセミ・ホワイトカラー的な職業に就くことが多い。

一方生徒の職業的アスピレーションないしは職業上の興味を調査Ⅱによって見ると、既に中学卒業の段階において、成績上位のものでは専門的職業を目差すものが圧倒的に多いのに対して、下位の者では自分で店を持てるような職業が一番多く（39%）次いでブルーカラー的職業（13%）となっている（表3）。このことは、学力最上位のクラスがAクラス高校からいわゆる有名大学へ入り、高級専門職に就き、その次のクラスは（家庭の経済的事情による面が多いが）、伝統ある工業高校へ入って中堅技術者として専門の技術を生かす、次いでBクラスの普通高校へ入って一応大学は卒業するがこれといった専門性はなく、いわゆるホワイトカラーになることを目差し、次いでBクラスの工業高校へ行って上級ブルーカラ

ーに、商業高校を出て中下級ホワイトカラーや小商店主、Cクラスの高校を出て同じく下級ホワイトカラー、更に中学卒だけで職に就いて下級ブルーカラーや小店員になるといったパターンが、学力（成績）を主要な軸にとった場合のほぼ大まかな形として考えられる。

問題はこうしたパターンが強ければ強い程、学歴主義的職業階層と密着して、能力があるにもかかわらず家庭の事情で上級学校へ進めなかったものまでも、前述のパターンの中に押し込めてしまい、しかも終身雇用的色彩の強い我が国では、後になっての変更が難かしい為、能力が発揮されないまままで終ってしまうようになるということである。

## 2 高校卒業期

高校卒業期の場合、前に述べたように選択の第一段階は高校入学時において既に終っており、然もその過半数は就職する為、中学卒就職者のように、経済的ないしは能力的に止むを得ず就職するのだという劣等感的なものはない。更に又、就職する職種も中学卒に比べてはるかに広範囲に渡っていることから見ても、興味や能力を或程度生かした選択が可能のようであり、その点でも問題は少ないようである。

ただ最近の傾向として、高校卒でホワイトカラー的職業に就き得る機会が次第に狭められ、又ホワイトカラー的職業に就いた者も、次第に単純事務労働的な lower white collar という新たな階層に追いやられつつあるように思われる。しかもこの新しい階層は、upper blue collar とほとんど変らないか、あるいはむしろ下位の階層になりつつある。このことは後に述べるように、高校生の職業選択―従って又進学を含めた進路選択の方向―を変えつつあるが、その原因としては、(1)ホワイトカラー的職業、特に書記的仕事の専門性の稀薄化と、要求される能力の低下、それにもかかわらずなお前述の報酬配分の遅れから随性的にホワイトカラー的職業に、高い報酬（階層的優位性）が与えられていること、(2)いまだに根強く残っている学歴主義と、その学歴獲得を目差しての大学進学者の増加があげられよう。

表3

希望する職業（調査Ⅱ）

職業選択と学歴（野村）

		ブルーカラー的職業	ホワイトカラー的職業	自分でやる職業	店をよう職業	人気のある職業	専門的職業	N
親の職業	ホワイトカラー	13%	10	13	4.9	44.3	60	
	ブルーカラー	16	8.6	29.5	10	16	81	
	商工自営	3.5	7	31.5	14	24.5	58	
	その他の職業	9.5	9.5	31	2.0	21.4	40	
学習成績	上	6.6	6.6	15.4	5.5	45.0	91	
	中	12.6	7.6	29	7.6	22.7	79	
	下	12.8	11.4	38.7	11.4	8.6	70	

（注） その他及び不明は表より省いてある、従って合計は100にならない。

表4

大学への進学理由

		大学卒の学力が必要	大学出の方が就職に有利	親がすすめるから	教養を高めるため	N
高校別	A	75.8%	7.8	2.1	15.6	99
	B	63.0	18.5	2.2	13.0	136
	C	41.8	26.8	5.4	23.2	206

ホワイトカラー的職業の専門性の稀薄化ということは、一見職業の分化、専門化、高度化という現代産業社会における一般的すうせいと反するように見えるが、たとえば、工場労働における流れ作業のような単なる工程の細分化は、実は作業の単純化を意味することが多く、科学技術面での高度の専門化と同一に論ずることは出来ない。同様に、ホワイトカラーの職場が合理化されるにつれて必要とされる訓練期間が次第に短かくなり、「全就業人口の約8割は3ヶ月以内で覚えれる仕事をしている」<sup>(9)</sup>し、「ホワイトカラーの職種の中には、一日で覚えられ、ほとんど無教育のものにも立派にやりこなせる仕事もある」のである。にもかかわらず未だにホワイトカラー的職種の職種には、かなりの教育が必要であると考えられていることと、ホワイトカラー的仕事を求めるものが多いことからくる競争が、学歴を持つことをホワイトカラーへの近道たらしめているだけであって、前述のごとく能力の点では必ずしも大学卒が高校卒より優れているとは言えないのである。

従って特殊な職種や地位の者には専門性は必要であろうが、大部分のホワイトカラーには専門的且つ高度な教育は不要であることが多い。日本の場合、文科系学科の大学卒業生の就職状況にそれがあらわれている。一般の事務的職種の入社試験については、法科卒であるのが、経済、商科であるのが、ほとんど無差別であり、およそ企業における実務とは縁遠い教育学部や文学部の卒業生でも一般の会社の事務職に就職する者が多いのである。同じ傾向は大学入試の段階でも見られる。私立大学入学志願者で、法、文、経、商等をあわせて志願する者は圧倒的に多い。もちろんそこには、何でもいから大学へ入りたいという気持も強く働いているであろうが、それと共に、どの学部へ入っても卒業してから彼等の就こうとするホワイトカラー的職種にとつて、余り支障はないという判断もあるのである。

従って高校卒で職に就こうとする場合、ホワイトカラー的職種に就きにくくなったこと、及びホワイトカラー的職業の専門性が低下するにつれて、個人的能力を發揮しうる余地も少なくなったことから、能力ある者がその能力を生かす為

は、ホワイトカラー以外の特殊な分野の方が有効であるように思われる。このことは高校卒業生自身にも自覚されており、現実に高校卒で就職しつつ各種学校へ入って特殊な技術を身につけようとする者は非常に数に上っている。従って無目的に、あるいは単に大学卒の方が就職に有利であろうという位の理由で、大学に進学した者より上昇移動に対するアスピレーションも強く、又その可能性もあるように思われる。

こうした傾向を裏付けるものとして、調査の結果を見てみよう。先に述べたように、中学から高校への進学に当って、伝統ある工業高校への進学者の学力は、Bクラスの普通高校のそれよりも上位にあって、いわゆる有名高校に次いでおり(調査Ⅲ)、Bクラス高校卒業者の大部分が、何となく大学へ行って単純ホワイトカラーになるのに比べて、むしろ中堅技術者としての専門性を持つとする傾向がうかがえるし、調査Ⅱにおいても、成績上位者程専門的職業に就きたいという希望が多く、下位の者との差は顕著であった。

同じ傾向は高校生になつてからも続いている。即ち、調査Ⅰで進学を単にホワイトカラーへのパスポート的な学歴取得の為と考える者は、Cクラスの高校に多く、専門的能力を身につける為と考える者はAクラスの高校に多い(表4)。言いかえれば、学力下位の者程学歴としての大学を、従つて又専門性という点では無目的な進学を考へていと言つていいだろう。このことは進学者に対して希望する大学及び学部を聞いたところ、Aクラスの高校では大部分(55%)が高校二年の末において大学、学部まで決めておるのに対し、Cクラスでは26%にすぎず、大学ならどこでもいいという回答もCクラスの高校に最も多く、約5%いる(Aクラスではなし)。これらの事は当然成績下位者程、単なるホワイトカラーを目標としているということを予想させるが、それは次にのべる職業へのアスピレーションからも読みとれる。

高校卒業期は、発達段階的に見て、中学卒業時よりは、興味や価値や能力との関連において職業を選ぶようとする傾向は強いだろう。我々の場合、高校生が将来就こうとする職業を、価値意識と、能力ないしは努力をクロスさせた形でみる

表 5

希 望 す る 職 業 (調査 I)

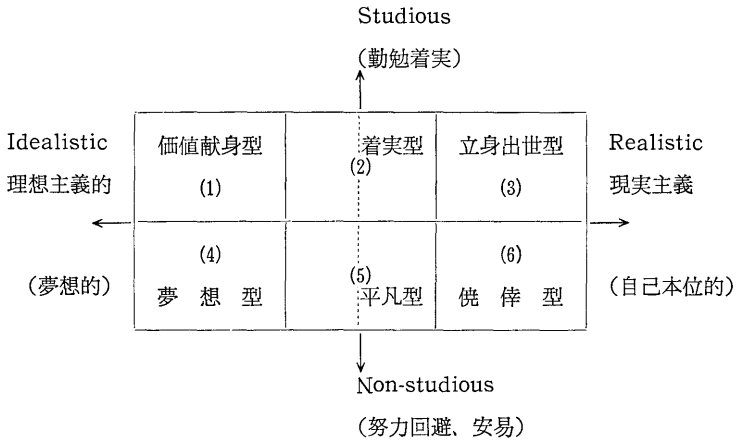
類 型		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	N	
学 校 別	普通 高校 (男子)	A	15.2	39.4	6.1	5.0	9.1	7.1	99
		B	8.7	29.0	5.1	3.4	25.5	11.9	137
		C	3.6	24.0	8.0	6.2	28.1	14.3	243
	工業高校		4.0	34.2	5.2	2.8	25.9	8.6	175

職業選択と学歴(野村)

(注) 分類不能(約10%)は表より除いてある  
 類型欄の1.2……は下欄及び本文参照  
 普通高校の学校別A.B.Cは学力上、中、下とよみかえ得る

図 1

希 望 す る 職 業 の 類 型





為、フリーアンサーで回答された職業を、彼等の志望する大学、ないしは学部と関連させて次の六つの類型にカテゴライズしてみた。(図1参照)

(1) 社会への貢献、ないしは真、善、美等の価値への献身等、何らかの理想主義的な傾向を持ち、かつ望みが高く、それに至るのに努力を必要とするような仕事、たとえば裁判官になりたいとか物理学者になりたいと言ひ、それぞれ法学部なり理学部を志望している者(価値献身型)

(2) (1)程理想主義的ではないが、少なくとも社会的分業の一端を担うという意味で社会的視野を持ち、且つそれに至る道がはっきりしており、着実に目標を定めて努力していると見られるもので、主として専門的職業に当たるたとえば、医者になりたいとか、技師、教員になりたい等(着実型)

(3) 社会的視野はほとんどなく、職種よりは地位の方に焦点が向けられているもの、志望大学や学部ははっきりしており、その意味では近い目標が定まりそれに対する努力はしていると見られるもの、たとえば志望校は一流大学経済学部で会社重役になりたいというような者(立身出世―地位志向型)

(4) 志という点では大きなものを持っているが、それに至る道が不明確であつて着実性に欠け、理想主義的というよりは空想的と思われるもの、たとえば大牧場主になりたい等(夢想型)

(5) 社会的視野もなく、又立身出世を考へるわけでもなく、単にホワイトカラーになればよいとか、親の職業を継ぐと言つた平凡な型(平凡型)

(6) 社会的視野は全くなく、努力する気もなく、一かく千金的なぎょうこうをねらつたりするような者、あるいはマス・コミに持てはやされるような華やかな職業を求める者や、少女趣味的でスケールの小さいもの、たとえば小奇麗な洋品店をやりたいとか、いわゆるスターや運動選手に憧れるといった者、(僥倖型)

結果は表5の通りである。

職業選択における諸種の要因を余り考えずいゆる夢みたいなことを考えている者(類型4)は、普通高校では余り差がないが、実業高校ではさすがに少ない。又自己本位的な立身出世を願うもの(類型3)も学校間に大きな差は見られない。

しかし、かなりの努力と才能を要し、理想主義的な職業観を持つ者(類型1)及びはっきりした職業的目標を定め、且つそれへの手段を認識して着実に努力していると見られる者(類型2)は、明らかに成績上位者(Aクラス高校)に多く、下位(Cクラス高校)に少ない。なお当然ではあるが、工業高校では着実型(類型2)がA校に次いで多い。それと逆に平凡型を求める者は成績下位者に多く上位者との差は顕著である。

更に各人が頭に描いているそれぞれの職業に就く為の努力や能力をどのように考えているかを問うてみたところ(表6)、単純ホワイトカラーを志望する者の非常に多いC校の場合、42%が高校卒でもやれる仕事だと見ている。(A校が約11%又Bでは約30%)即ち成績中ないし下位の目差す単純書記的ホワイトカラー的職業は、仕事内容及び要する能力から見れば、高卒でもやれると考えている者が多いと考えていいだろう。それにもかかわらず彼等の大部分は大学へ進学しようとするのである。このことは、余り能力や努力の要らない職業としてホワイトカラーが考えられているということ、そのホワイトカラーへの最も有利で手っとり早いルートとして大学卒の学歴が考えられていることを示していると思えていいのではなからうか。

以上から分かることは、大部分の実業高校のように、初めから高校卒で職に就くことを考えている者、及び有名高校から一流大学へ入る者については、多少とも専門性を生かした職業につき得るといふ点でも、又ある程度階層移動へのアスピレーションを持ち得るといふ点でも問題は少ないであろうといふことである。従って問題は、将来の職業についての専

表 6

希望する職業に対する学歴観 (調査 I)

職業選択と学歴  
(野村)

		高校卒でもや れる	大学卒なら出 来る	大学卒+努力	N
普 通 高 校	A	10.8	29.4	59.0	99
	B	29.7	30.6	44.5	137
	C	41.6	22.6	28.0	243
工 業 高 校		75.5	5.9	13	175

表 7

大学入試への見通し (調査 I)

		一応普通に勉強し ていれば入れる	余程頑張らない とむつかしい	全然無理だ	N
A 校		35.8	48.5	3.0	99
B 校		9.6	80.2	2.0	137
C 校		6.2	74.1	10.1	243

(注) 無答は表より省いてある。

門性を余り考えず、ばく然と階層移動への有利さを求めて大学へ行こうとする、主として成績中、下位者の選択のプロセス及びそこに起こって来る親とのコンフリクトである。

T・パーソンズは高校卒での進学が就職かの選択を、(1)いわゆる労働力 (Labor force) としての役割につくか、(2)専門的技術的な計画遂行 (executive) の役割につくかの選択であり、階層的には上層階級へ上昇し得るか、中間層で終るか、のスプリング・ボードに立っているのだと述べている。しかし現在の日本では、進学が就職がもたらす差よりも、進学の中で一流大学へ入るか、二、三流にしか入れないかの差の方が大きいように思われる。後に述べるように、無名の大学では場合によっては高校卒よりも就職の条件は悪く、機会も少ない。こうした現象の原因は言うまでもなく、大学進学者の増大にある。エリート養成的教育であった戦前の大学は、戦後の学制改革により、出来るだけ多くの者に高等教育を与えようとする大衆化の方向へと進み、今や大学進学者は、男子の場合同年令の人口数の25%にも達する。従ってそのすべてがいわゆる専門的職業、あるいは管理的ポジションに就くことは数字的に不可能である。かつての大学卒のイメージは直ちに立身出世とつながるものであった。しかし現在では、一部の有名大学を除いてそのような事は考えられない。従って一流大学へ入り得る可能性を持った生徒にとってこそ、興味なり価値なり、能力なりは学部選択の、従って又職業選択の基準として具体性をもったものであるが、そうでない者にとって、それ等は余り重要でなく、単に就職への有利さによって学部選択がなされる傾向が多いし、極端な場合、学部の選択は入試科目の得手、不得手によってなされる。A大学は数学があるから受験しないとか、B学部は受験科目が少ないから受けるとかいうようなことは、日常よく耳にするところであろう。これらはいずれも一流大学以外は、階層移動への大きな期待は持てぬこと、及び単なるホワイトカラー的職種に就くには専門性が余り重要でないこと、が受験者に認識されていることを裏書きするものである。従って一流大学への可能性をもった者の間では、家族ぐるみの形で、激しい一流校を目差しての競争が生まれると共に、その可能性のない

者にとつての無目標な学習態度が生まれるが、そこに親との大学への認識の食い違いが加わる時、親との激しいコンフリクトを生むであろう。

K・デイヴィスは親と青年との間のコンフリクトの主要なものの一つとして職業選択をあげているが、日本の場合、職業選択（大学進学の場合は学部選択）というよりは階層移動と結びついた意味での学校選択に、即ち、少しでも高いランクの大学へ入学させようとする所にコンフリクトが生ずるようである。少しでも高いランクの大学へ入学させようとするれば、勢い学業についての督励が厳しくなるし、子の能力以上の大学を期待するであろう。我々の調査の結果から見ても、高校生が家庭で最もやかましく言われることは、成績や入試に関することである。そしてこの傾向は、下のランクの高校程大きい。（A校で38%、C校では54%）

又、各自が志望する大学への入学の見通しを聞いた所、表7のように、Aクラスの高校では、大部分がいわゆる有名大学を受験するにもかかわらず、一応普通に勉強していれば入学出来るだろうと答えたものが36%あるのに対して、Cクラスの高校では、大部分が三流以下の大学へ進学するのに、普通に勉強していればと答えたものは5%、逆に全然無理だと答えた者が12%に上る。なお当然のことではあるが、B、Cクラスの高校では、よほど頑張らなくてはならないという答が65%〜80%ある。

これ等の結果からほぼ次のようなことが、パターンとして考えられるのではなからうか。即ち、成績がよければ（ここではAクラスの高校生）親も子に対して階層移動への望みもかけ得るし、学部選択（広義には職業選択）についても、どの道を選んでもかなりのことをやってくれるであろうとの予測がつく為、子の意志が尊重される。それに対し中程度の学力の場合（Bクラス高校）、親は何とか少しでも高いランクの大学へ行って欲しいと子を督励するであろうし、又子の能力を考えて、なるべく無難なホワイトカラー的職業に就きやすい学部をすすめて、子が余り特殊な領域（学部）へ行く事を

押えるであろう。更に下位の場合（Cクラス高校）は、むしろ下降移動への恐れが強く、何としても大学を卒業してもらわないと社会での敗者になるという焦燥感が強いであろう。余り進学したくないのに親がやかましく言うから進学するという成績下位者に多いケースは、こうした事情を物語るものと言えよう。

### 3 大学卒業期

大学卒業生の場合、中学、高校という二つの下位段階によってすでにある程度の選択が行なわれ、その結果として、学部、学科が決定されているのであるから事情はかなり異なる。特に専門性の高い理科系諸学科の場合、興味、才能、価値観等の職業選択の根底的な基準についての考慮は、大学入学時にほぼ終っており、学科の選択はそのまま職業選択とつながっていることが多い。文科系諸学科の場合は、前に述べたようにかなり問題を含んでいるが、それよりも大きな影響をもたらずのが大学格差の問題である。

高校卒業生の就職の場合は、求人側が高校卒に対し、はじめから中、下級職員としての期待しか持っていないことや、若年労働者の不足もあって、就職分野や条件についての学校格差は余りない。しかし大学の場合、その格差は就職条件を大きく左右する。

これを明らかにするには、まず就職というプロセスの現実を知らねばならない。それは中学、高校にも通じて言えることであるが、新卒者にとっての職業選択とは、実は会社選択であり、特殊な縁故的ケースを除いて、学校の就職用掲示板に張り出される求人会社の範囲に限られる。いかに自分の就きたい職業ないしは行きたい会社があっても、その会社が学校へ人を求めて来なければ、行くことはおろか入社試験を受けることすら出来ない。そして学校に対する求人<sup>100</sup>の有は、大学において差が激しい。一流大学と無名大学とは、売り手（大学）と買い手（企業）が全く逆の立場になるのである。

このことが、一方では有名大学への志願者の集中という進学問題の病理的現象となつてあらわれると共に、他方始めか

らその見込みのない者にとっては、無目的な大学進学及び卒業証書さえもらえばいいという学習態度となってあらわれるのであるが、それについては既に述べたのでここではふれない。

興味や才能を軸とした選択が、既に大学の学部選択ではほぼ終わっているとすれば、次いで起こってくるのは、E・ギンツバーグの言うように、現実的条件の秤量による選択である。しかし現実的選択は、本来状況的且つ個別的なものであって、類型化した形で論ずることは難しい。

ただ最近のマス・コミ等ではしばしばとり上げられる就職状況を見てみると、その中にはかなり共通した選択基準があるように思われる。その主なものとしては、

(1) 会社の規模（具体的には資本金等） (2) 会社の安定性や将来性（株価等）、 (3) 勤務地（本店や支店の所在地、ビル街か工場街か等）、 (4) 昇進度、(5) 会社の知名度等があげられる。中には休暇のとりやすさや、レジャーの為の福利施設、更には、海外へ出張する機会の有無と言ったことも選択の条件に入れられている。「職業」を選択するという意味からは、全く逸脱していると思えぬことすら本気で考えられているのである。しかもこの傾向は大学卒に限らず、中学、高校の段階にも見られる。

それには、今まで述べて来たように、職業構造そのものの歪みや、時代的な価値意識の変化、即ち関心の焦点（Focus of interest）が生産、労働から余暇、消費へ移ったということもあるが、一方就職者自身の主体性の欠除と言った点からも考えられねばならないだろう。

以下、結びにかえてその問題について考えてみたい。

実存分析的視点からすれば、職業選択は、それが最も理想的な形で行なわれる時、一生を託すにたるライフワークを選び出すことである。言葉をかえれば、ある価値へのコミットメントであり、社会への参加（アンガジュマン）の仕方の決

定であると言えよう。

更に又、職業の選択は未来志向的なものである。人は現在がいかに苦しいものであっても、未来への光明が見出せれば、それとの関連において自分の生きる意味を見出し得る。逆に現在がいかに豊かであろうとも、未来への光明が見出せない時、生きる希望を失うものである。昭和元祿と言われる現在の日本に、暗黒と絶望の影を見る識者の警告は、それを指摘したものであろうし、青年達(それは本質的に未来に生きる者である)の奇きょうと思える種々の行動の中に、未来への絶望が含まれているように思われる。そしてそのような事態を招いた数多くの要因の一つに、職業の問題があると考えられる。即ち、ライフワーク的な、ないしはアンガージュマン的な意味での職業選択が、今まで述べてきたように非常に困難であり、人々(特に青年)は、余りにも現実的な選択しか行い得ず、更に極端な場合、職業選択への絶望から、職業を人生における第二義的なものと考え、余暇へ関心の焦点を向けざるを得なくなっている所に問題があると考えられる。

職業選択の問題は、単に対症療法的な考えでなく、今や実存的立場から、再びその本来の意味を問い直されねばならない時期に来ていると言えるのではなからうか。

付 (本稿の一部は、前号の拙稿、現代社会における青年期の問題(Ⅰ)の補遺とする予定であったが、問題を一般化し、調査資料も加えて独立の論文とした。従って第一節の一部に於て前号の要約をのせさせて頂いた事をお許し願いたい。)

〔注〕

(1) T. Parsons et al., *Toward a General Theory of Action*, 1952

作田他訳「行為の総合理論をめぐって」三一一頁—三三二頁

(2) K. Davis and W. E. Moore, *Some Principles of Stratification*, ASR Vol.10. PP. 242—249

なお、詳しくは、拙稿「現代社会における青年期の問題」



- 社会問題研究 第一八巻 四号所収 五八頁―六一頁参照
- (3) C. W. Mills, *White Collar*.  
杉政孝訳「ホワイトカラー」 二二〇頁
- (4) C・W・ミルズ 前掲書 二一九頁―二四二頁
- (5) Eli Ginzberg, et al., *Occupational choice: An Approach to a General Theory*, 1961 参照
- (6) 拙稿「都市高校生の生活態度と価値観」教育社会学研究第22集所収
- (7) 青少年白書 一九六六年版 一三六頁―一三七頁
- (8) 森口兼二「進学機会の規定因子に関する一研究」 京都大学教育学部紀要第六号参照、特に第Ⅲ節
- (9) 森口兼二 前掲論文 一四五頁
- (10) 労働白書 一九六七年 七二頁―七三頁 青少年白書 一九六六年版 一三六頁―一三七頁
- (11) 青少年白書 一九六六年版 一二五頁―一三四頁
- (12) C・W・ミルズ 前掲邦訳書 二二八頁
- (13) 青少年白書 一九六六年版 九六頁―九八頁
- (14) T. Parsons, *The School Class as a Social System in Social Structure and Personality* 1964 P. 146
- (15) K. Davis, *Sociology of Parent-Youth Conflict*, ASR Vol.5, No. 4 P. 533
- (16) たとえばサンデー毎日昭和43年9月8日号等、週刊誌にはしばしばとりあげられる。